みつぎ便り

107号
8月号

板橋区役所みどりと公園課の花づくりグループと
エコポリスセンターの環境観察員地域自主活動グループに
所属しているボランティア団体「見次の会」です

平成２７年８月１日　http://itbs-ecopo.jp/projects/environsurvey/2013/000253.htm

見次公園のはじまり

見次公園の名前は、大永四年（一五二四年）志村城落城の際「見次権兵衛」が合戦で討死にした長男権太郎を弔い、自らの邸宅を仏寺「見次山延命寺」と名付けたことに由来するといわれています。

見次公園は昭和二八年四月に板橋区初の魚釣りやボートを楽しめる公園として開園しました。開園当時はまだ戦後を色濃く引きずっており、公園を囲む柵は縄張りで斜面には笹が群生し自然のままの風情が残されていました。近くの凸版印刷の塀際でテント生活をする多くの人々が公園の湧水で炊事をしていました。

戦後日本経済は朝鮮戦争特需を契機に急速に回復し、高度経済成長期に突入しました。しかし公園の南側を流れる出井川は発展途上国のニュースを見るようなありさまでした。上流にある工場からの排水で悪臭を漂わせ、七色に変化した川に落ちたボールを拾う子供が倒れることもあった…今では考えられない状況です。また大雨が降ると必ず洪水となり、都営住宅の家々はしばしば床上浸水したものでした。

その後東京オリンピックに向けて出井川の上に首都高速道路五号線が建設され、出井川が地下の暗渠（あんきょ）となったおかげで洪水が無くなった一方、川端に植えられていた多くの桜の木は伐採されました。見次公園の向かい側に一本だけ記念として残され桜は、今も春に花をつけ公園を行き来する私たちを見守っています。

さて、私が子供のころの記憶には公園の池に中の島はありません。いつ頃に島が作られたのかと区役所の公園課に問い合わせたり、図書館で調べてもわかりませんでした。きっと国造りの神様が夢を見て、寝ぼけまなこで見次池をかき混ぜた魔法の棒のしずくが一滴、池の真ん中に落ちて中の島が出来たのだろうと思うことにしました。（安）

写真は板橋区公文書館に納められた開園当初の見次公園の様子です